

第7回 酒田市文化資料館光丘文庫企画展

合併20年 ひろがる酒田～明治から平成の合併の歴史～

開催期間:令和7年8月30日(土)～12月26日(金)

平成17(2005)年11月1日に、酒田市・八幡町・松山町・平田町が合併し、新たな「酒田市」が誕生してから20年。地域のつながりと歴史を振り返る節目の年を迎えました。

現在の酒田市ができるまでには、様々な変遷がありました。明治22(1889)年の市町村制施行に始まり、昭和4(1929)年には商業都市として栄えた酒田町と士族の村・鵜渡川原村(現亀ヶ崎地区)が合併。この時は反対意見も多く、地域の複雑な思いが交錯しました。昭和8(1933)年の市制施行では街全体が祝賀ムードに包まれ、その後も周辺村落や飛島との合併が続きました。昭和29(1954)年には「昭和の大合併」と呼ばれる酒田市と周辺10ヶ村が一つとなり、地域の文化や交流がさらに広がりました。

本展では、当館所蔵の古地図や写真、当時の新聞記事などの資料を通して、明治から平成にかけての酒田市の合併の歴史をご紹介します。時代とともに変化する地域の姿と、そこに込められた人々の想いや決断が織りなす酒田市の歩みを知り、未来を考える機会となれば幸いです。

江戸時代の庄内地方

庄内地方は、日本海に面し三方を山々に囲まれた豊かな米どころ・庄内平野が広がっています。その中央を流れる最上川を境に、川北が飽海郡、川南が田川郡に分かれていました。

最上川は人々の暮らしを支える舟が行き交う大切な川でした。内陸部で収穫された米や特産品の紅花は、小舟に積まれて川を下り、河口の酒田港まで運ばれました。

酒田は「西の堺、東の酒田」と呼ばれるほど繁栄した商業都市で、北前船が寄港し全国との交易で大いに賑わっていました。一方、鶴岡は庄内藩酒井家の城下町として、この地域の政治・行政の中心となっていました。

このように庄内地方は、豊かな農業生産と活発な商業活動により、江戸時代を通じて繁栄を続けました。

酒田市指定文化財

鳥海山模型 紙張子台付/作者不詳

庄内蔵岡と由利郡の矢島領との鳥海山頂をめぐる境界争いでは、宝永元(1704)年に幕府が矢島方の言い分を退けて、山頂だけではなく矢島側の中腹までを庄内藩領としました。



その調停に用いられた判決の絵図と張り抜き鳥海山模型は、吹浦の大物忌神社にあります。同時に控として同じものが作られていたのがこの模型です。

現在の山の形と違っているのは、享和元（1801）年の大噴火のためです。

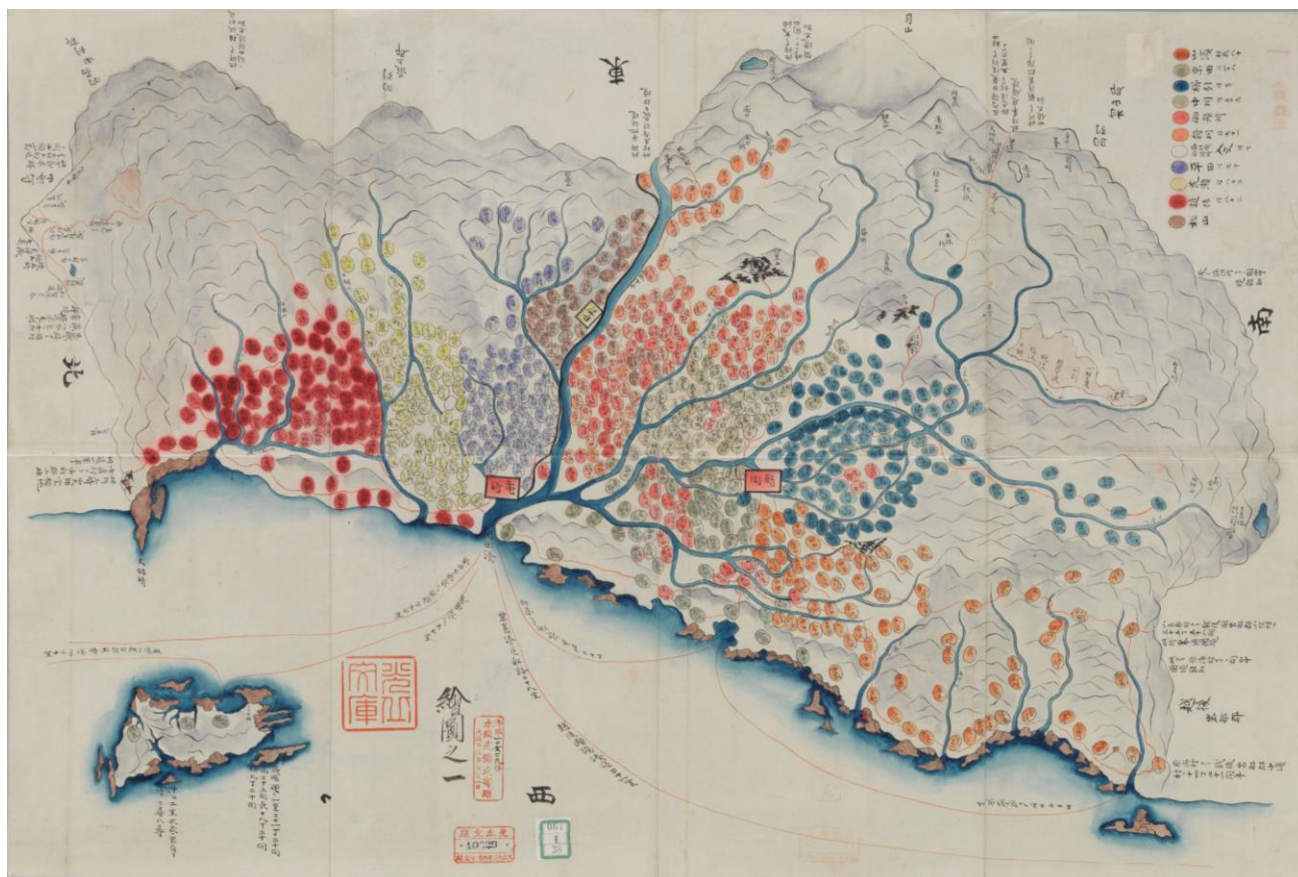
大泉叢誌絵図 二郡縮図(写)/江戸時代後期 ※「光丘文庫デジタルアーカイブ」でもご覧いただけます。

この絵図は、明和7（1770）年に庄内藩が幕府の国目付に提出した「庄内二郡絵図」の縮図です。原本は、鶴岡市の致道博物館に、その写しが当館に所蔵されています。

絵図では、左が北を示しており、武士や町人が住む鶴ヶ岡（現鶴岡市）、亀ヶ崎と松山（現酒田市）の三つの城下町が四角で大きく描かれています。一方、農民が住む村々は楕円形で表現されています。

これらの村々は現在の大字にあたり、農民の生活共同体であると同時に、藩の重要な財源である年貢米を徴収する単位でもありました。各村では肝煎・添役・長人の「村方三役」と「五人組」が、藩による農村統治の末端を担っていました。

村の色分けは領主の違いを表し、庄内藩領の「三郷五通」（飽海郡が遊佐郷・荒瀬郷・平田郷の三郷と、田川郡が山浜・京田・櫛引・中川・狩川の五通）のほか、預地（旧天領）や松山藩領が区別されています。



市町村制施行前の自治制度 大区・小区制

明治維新政府は、明治5（1872）年に戸籍法を施行し、各家の代表者である「戸主」

を通じて住民を把握しました。これまでの村や町とは別に「戸籍区」という新しい区画を設け、「戸長」と「副戸長」という役職を置いて戸籍調査に従事させました。しかし、この制度は全国一律に実施されたわけではなく、旧庄内藩（庄内藩→大泉藩→大泉県→酒田県→鶴岡県と変遷）の地域では、戸籍法による区分は設けられませんでした。

同年10月には、この制度が「大区・小区制」として正式な行政制度になりました。これは、大きな区画である「大区」に区長、その下の「小区」に副区長、さらに町村には戸長・副戸長を配置する仕組みでした。

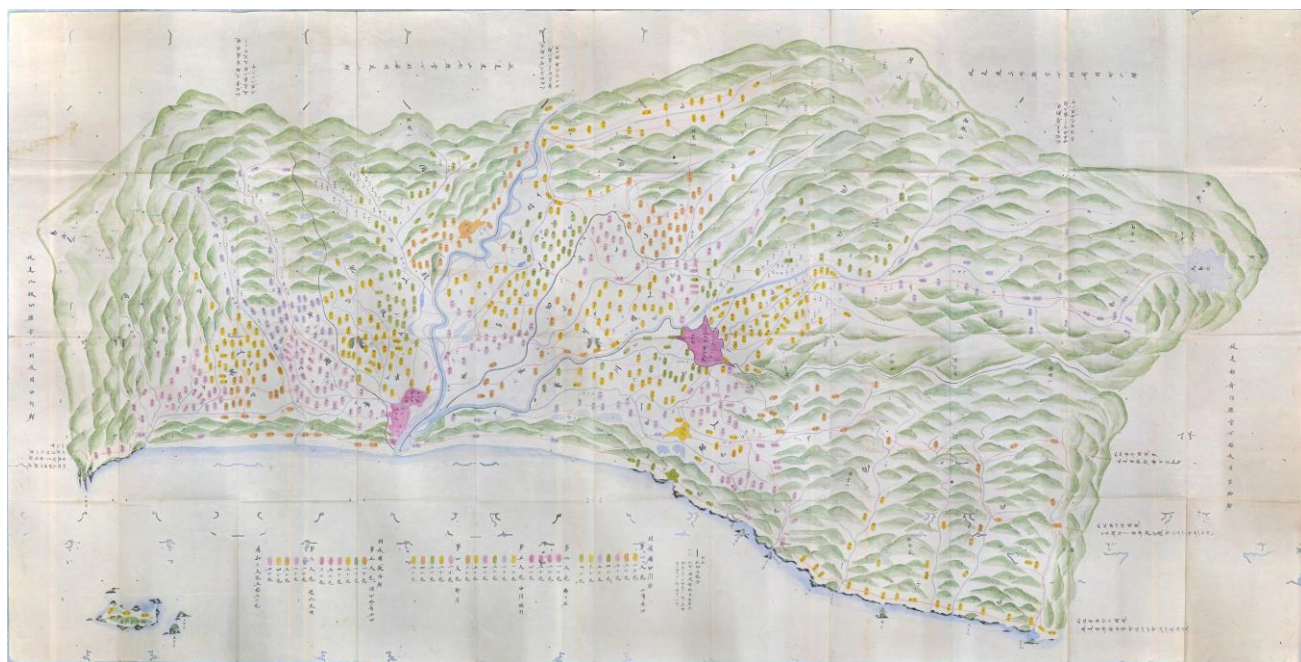
ところがこの制度の実態は、地域によって様々でした。旧山形県や置賜県では政府の方針通りに進められましたが、酒田県では従来の「郷」を大区、「組」を小区とし、実質的には藩政時代とほとんど変わりませんでした。庄内地域で本格的な大区・小区制が実施されたのは、三島通庸が県令として赴任した明治8（1875）年の全面的郡村改革からでした。

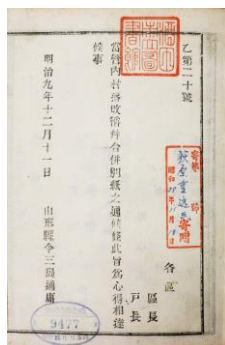
この制度は、明治政府が地方を効率的に治めるための重要な第一歩となりました。

大区・小区に色分けされた庄内三郡図/明治時代初期

この絵図は、明治政府が新たに導入した「大区・小区制」という行政区分に基づいて、庄内地方を色分けして描いたものです。当時の新しい行政のしくみが、色でわかりやすく表現されています。

絵図は、黒い太い線で第1大区から第6大区までの境界が示され、さらに小区ごとに異なる色で塗り分けられているのがわかります。また、楕円の印は村を表し、その中の△印は興野、○印は新田を意味しています。江戸時代の藩による統治から、明治時代の近代的な行政区分へと大きく変化していく様子を見ることができます。





◀ 庄内当管内村落改称合併/明治9(1876)年12月11日

明治8（1875）年に山形県令として三島通庸^{みしまみちつね}が着任し、政府の新しい方針「大区・小区制」にしたがって、それまでの村や郡の区切りを大幅に見直すことになりました。

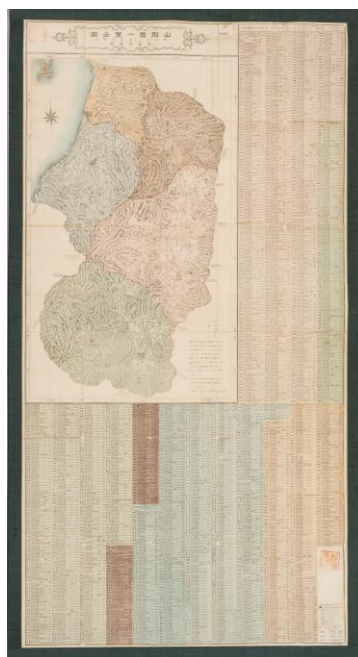
この冊子は、その翌年に村の名前や境界線を整理し直した時のものです。

町村制と郡制の施行

明治11（1878）年7月、明治政府は「郡区町村編制法」^{ぐんくちょうそんへんせいほう}を公布しました。それまでの大区・小区制を廃止し、行政区画として郡を置き、町村を自治体として復活させました。大区・小区制では古くからの町村名を廃止して番号制を採用していましたが、住民に親しまれず、うまく機能しませんでした。そこで昔からの町村名に戻すことになりました。

明治21（1888）年4月には「市制・町村制」^{しせい ちょうそんせい}が公布され、続いて明治23年5月には「府県制」と「郡制」^{ふけんせい ぐんせい}が公布されました。これらの地方制度は、第一次伊藤博文内閣の内務大臣であった山縣有朋^{やまがたありとも}によって確立されたものです。「市制・町村制」^{しせい ちょうそんせい}は公布から1年後の明治22（1889）年4月1日より施行されました。しかし、地方自治を行うためには多くの資金が必要であったため、財政力の乏しい町村間での合併が急速に進められることとなりました。

当時の市制の基準では、人口2万5千人以上の市街地でなければ市とは認められませんでした。酒田はこの基準に満たなかったため、市制ではなく町制が施行されました。

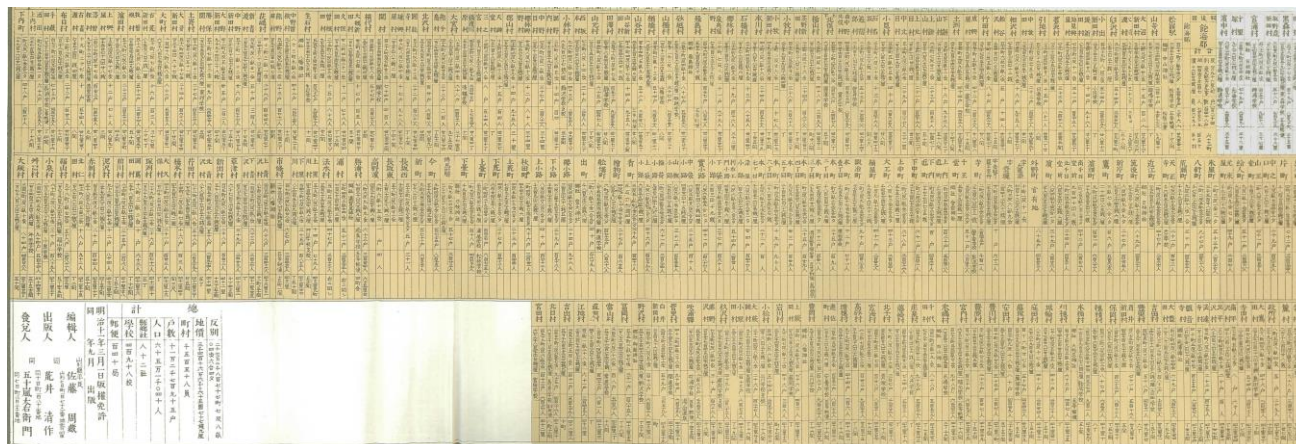


◀ 山形県一覽全図(山形県立図書館所蔵)/明治11(1878)年9月

現在の山形県の形が確定した明治9（1876）年8月の統一山形県成立後に作成された、明治初期の県全域を詳しく描いた地図です。絵図には「山形県管内各町村一覽科目表」が添えられており、県内の各町村について戸数、人口、地価、学校などの詳細なデータが一覧表として整理されています。この一覧表に記載された数値は、明治10（1877）年と明治11年に実施された調査に基づくものであることが、作者である佐藤周藏によって記されています。明治維新後の新しい行政制度のもとで、山形県がどのような姿だったかを具体的な数字とともに知ることができます。

飽海郡の町村/明治11(1878)年9月

山形県一覧全図に掲載の飽海郡の町村を「山形県史 近現代編付録1」より拡大したもの。



◀ 初代 酒田町長 ^{ほんまみつる} 本間光輝/安政元(1854)年～大正11(1922)年

酒田本間家6代目光美の長男として生まれ、明治8(1875)年に家督を継いで7代目となりました。同年、旧藩主酒井忠篤^{さかいただすみ}に同行して鹿児島^{さいごうたかもり}で西郷隆盛の教えを受けました。明治13(1880)年には本間一族の子弟教育のため本立学校を設立し、明治18(1885)年には100石の米の施しを行い地域の貧民救済に尽力しました。明治22(1889)年の酒田町制施行とともに初代町長に就任し、明治25年まで在任しました。

町村制施行時に作られた新町村(後の酒田市となる2町22ヶ村)

新町村名	初代町村長	旧村名
酒田町	本間 光輝	酒田
鵜渡川原村	新関 弥惣吉	鵜渡川原
西平田村	菅井 惣左衛門	大町、遊摺部、大宮
飛島村	吉井 佳和	勝浦、浦、法木
西荒瀬村	佐藤 信敏	藤塚、酒井新田、豊里、穂積、高砂、宮海
新堀村	阿部 孫左衛門	丸沼、新堀、落野目、板戸、木川、門田、局
広野村	菅沢 伝太郎	大淵、広野新田、福岡
袖浦村	加藤 基平	黒森、坂野辺新田、十里塚、宮野浦、浜中、広岡新田
東平田村	土田 與助	生石、北沢、関、横代、境興野
中平田村	田中 農夫蔵	手蔵田、熊野田、熊手島、大槻新田、荻島、本川、茨野新田、中野新田、勝保関、土崎、大多新田、浜田、小牧、小牧新田、大野新田、古荒新田
北平田村	杉山 永次郎	漆曾根、新青渡、久保田、曾根田、古青渡、円能寺、布目、上興野、中野曾根、牧曾根
上田村	島田 良三	上野曾根、鶴田、吉田、吉田新田、安田、刈穂
本橋村	杉山 三郎治	本橋、庭田、豊原、城輪、豊川、大豊田、保岡
南遊佐村	石山 義孝	千代田、宮内、米島
一條村	佐藤 要太	市条、法連寺、政所、大島田、岡島田、前川、南平沢、北平沢、寺田
観音寺村	鈴木 沖	常禅寺、観音寺、麓、小泉、北仁田、芹田、大窪、塚瀬
大沢村	荒井 鑑治	大蔵、上青沢、下青沢、北青沢
日向村	小松 正之助	福山、新出、下黒川、赤剥、上黒川、泥沢、草津、升田、橋本
松嶺町	小華和 茂手木	松嶺
上郷村	小華和 業修	山寺、成興野、地見興野、大川渡、臼ヶ沢、大沼新田、柏谷沢
内郷村	鈴木 信也	引地、竹田、中牧田、石名坂、土淵、小見、上北目、中北目、相沢、茗ヶ沢、上餅山、下餅山
南平田村	渡辺 九十九	飛島、砂越、山橋、三之宮、郡山、桜林、石橋、山谷、桜林興野、堀野内、泉興野、天神堂、中野目、山谷新田、櫛橋
田沢村	和田 光錫	小林、西坂本、山元、橋山、田沢、南北中野俣
北俣村	前田 仲治	上下北俣

参考：山形県下市町村長助役議員人名録、酒田市史年表、八幡町史下巻、松山町史下巻、平田町史下巻

初代飽海郡役所(山形県立図書館所蔵)

明治12(1879)年創建

明治11(1878)年11月に郡制が施行されると、新しい行政制度に基づいて初代の飽海郡役所が建設されました。この建物は本町一丁目に位置し、三階建てのモダンな洋風建築でした。初代郡長は薩摩出身の貴島幸輔^{きじまさいすけ}が就任しています。しかし、明治27(1894)年の庄内地震により一部崩壊してしまいました。



2代目飽海郡役所/明治30(1897)年創建

明治12(1879)年9月に建てられた初代の飽海郡役所は、明治27年に発生した庄内地震により一部が崩壊する被害を受けました。そのため、同じ場所に平屋造りの新しい庁舎として、この2代目飽海郡役所が建設されました。



3代目飽海郡役所/大正5(1916)年創建

大正12(1923)年4月に郡制が廃止された当時、飽海郡役所は本町三丁目(現在の酒田市役所がある場所)に位置し、酒田町役場は本町四丁目(現在の酒田産業会館がある場所)にありました。その後、大正15年7月に郡役所も廃止されたため、飽海郡役所の建物は使われなくなりました。



昭和2(1927)年6月1日、元郡役所の建物の一部を改造して酒田町役場がこの場所に移転し、新たに開庁しました。このように、もともと郡の行政を担っていた建物が、町の行政の中心地として新たな役割を果たすようになりました。

3代目飽海郡役所(旧酒田市役所)の現在

3代目飽海郡役所は、時代の変遷とともにその役割を変えてきました。大正5(1916)年に郡役所として建てられた後、酒田町役場として使用され、さらに酒田市制の施行により酒田市役所となりました。この建物は、昭和39(1964)年に酒田市から土地改良区に

売却され、現在は最上川土地改良区の事務所として活用されています。建物は当時の意匠の一部を受け継ぎながら、今もなお現役の事務所建物として大切に使い続けられています。



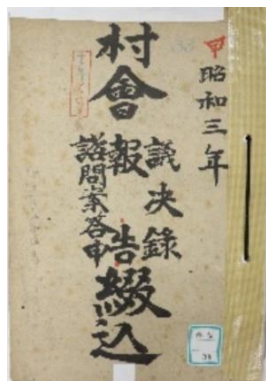
酒田町と鵜渡川原村との合併

鵜渡川原村は旧亀ヶ崎城下^{うどがわらむら}にあり、新井田川を隔てて酒田町に隣接していました。両地域は古くから密接な関係にあり、酒田町に築港事業や市制施行を目指す上で、鵜渡川原村との合併は欠かせない課題でした。大正9（1920）年当時の酒田町の人口は2万5千681人で、市制施行に必要な条件を満たすため、人口増加が急務となっていました。

大正7（1918）年に合併交渉が始まりましたが、鵜渡川原村^{うどがわらむら}の住民の多くは明治維新後に帰農した元士族で、商人中心の酒田町との合併に強い抵抗感を示しました。財産区の処理問題も絡み、合併反対の声が根強く、長期間にわたって交渉は難航しました。

転機が訪れたのは昭和3（1928）年5月でした。酒田市制施行を促進するため、両地域からそれぞれ6名の合併交渉委員が選任されました。鵜渡川原村^{うどがわらむら}では全524戸のうち約8割にあたる400名が賛成の意向を示しましたが、村内では同年6月から合併賛成・反対の演説会が相次いで開催され、激しい論争が展開されました。賛成派と反対派の対立は日増しに激化し、互いを攻撃するビラの配布合戦も繰り広げられました。

そして昭和3年8月8日、鵜渡川原村会^{うどがわらむら}で白熱した議論の末、反対派議員4名が退席し、残った7名の賛成により合併案が可決されました。翌9日には酒田町会でも満場一致で合併が可決され、昭和4（1929）年4月1日、鵜渡川原村は亀ヶ崎地区^{うどがわらむら かめがさき}として酒田町に合併しました。この合併により酒田町の人口は3万1,774人に増加し、市制施行への道筋が大きく開かれました。



村会議決録・報告・諮問案答申綴込
昭和三（一九二八）年

鵜渡川原村会議事録/昭和3(1928)年8月8日

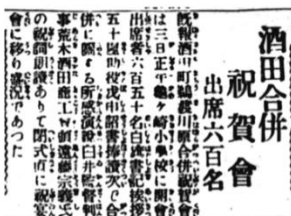
当日は午前9時から村議全員が出席して会議が始まり、90名もの傍聴者が詰めかけ、議場では酒田署から特別高等警察官2名が警戒にあたっていました。

村会では、新関村長が提案理由を説明した後、賛成派の議員が合併への賛成意見を表明しました。これに対し反対派の議員は2時間という長時間にわたって合併反対の意見を述べました。

当時の記録を通じて村の将来を巡って激しく議論が交わされた鵜渡川原村会の緊迫した状況をうかがい知ることができます。



酒田新聞/昭和3(1928)年7月22日



酒田新聞/昭和6(1931)年4月5日付



酒田新聞/昭和3(1928)年8月10日付

地元の新聞社が報じた合併に関する記事

期成同盟会ビラと反対同盟会ビラ(複製)



◀ 鶴渡川原村役場/五十嵐豊作画(「追憶の鶴渡川原」画集より)

鶴渡川原村役場は、明治22(1889)年の市町村制施行により発足した鶴渡川原村の行政の中心として、この地に置かれていました。鶴渡川原村は約40年間にわたって地域住民の暮らしを支える重要な役割を果たしました。現在、この役場があった場所には亀ヶ崎小学校があり、かつて村政の拠点として機能した土地で子どもたちが学び、新たな歴史を刻んでいます。

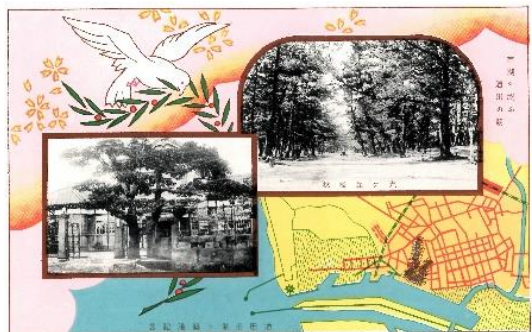
待望の市制施行

明治22(1889)年、日本全国で市制・町村制が始まりました。山形県では山形市と米沢市が真っ先に市となり、酒田や鶴岡など8つの町が町制を敷きました。その後、大正13(1924)年には鶴岡が県内3番目の市になりました。

港町として栄えた輝かしい歴史を持つ酒田の人々にとって、他の都市に先を越されたことは悔しいものでした。特に商工業者の間では、「町」という呼び方では商売上も軽く見られてしまうと考え、宣伝では「羽後酒田湊」と名乗ることが多くありました。

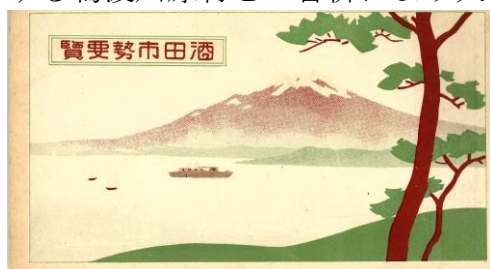
大正9年頃になると、鉄道などの交通網が整備され、最上川の改修工事や酒田港の修築工事も進みました。町の様子は大きく変わり、市制実現への声が高まりました。

昭和2(1927)年当時の酒田町の人口は、市制施行の条件である2万5千人を満たしていましたが、実際には3万人以上が必要とされていました。昭和4(1929)年、隣接



酒田市制施行記念絵葉書(中村書店発行)
昭和8(1933)年

する鵜渡川原村との合併により人口が3万人を超え、ついに条件が整いました。



酒田市勢要覽/昭和8(1933)年

そして昭和8(1933)年4月1日、待望の市制施行が実現しました。当日午前零時、山形自由新聞社が打ち上げた2発の花火が酒田市の誕生を告げ、翌日には報知新聞社の飛行機が上空を飛び、お祝いのメッセージを投下するなど、街全体が歓喜に沸きました。

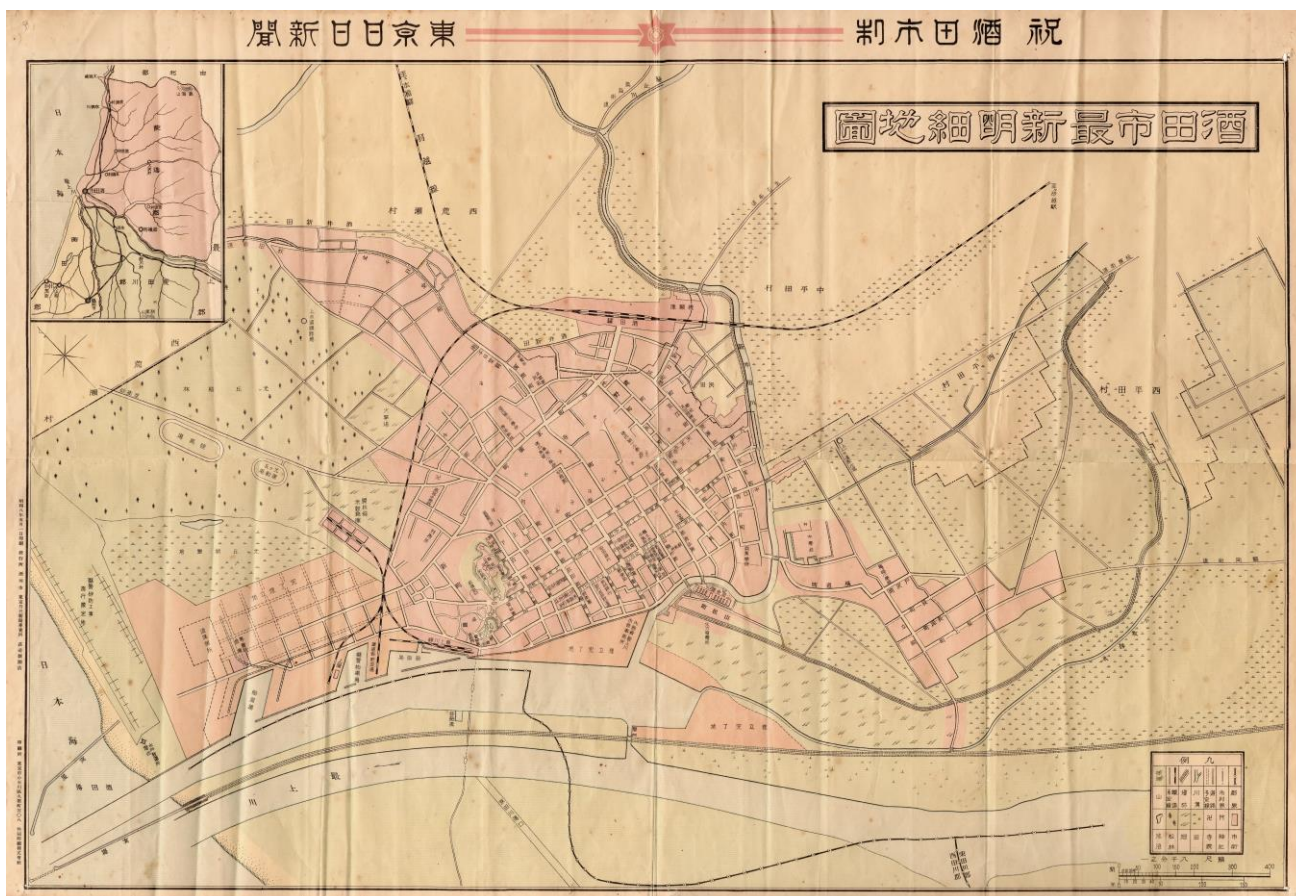


◀ 酒田市の新たな門出を祝う記念品/昭和8(1933)年

市制施行を記念して全世帯に配布された扇子です。扇面に記された「克己」という文字は、初代酒田市長に就任した中里重吉の字です。
なかざとしゅうきち

祝酒田市制酒田市最新明細地図とうきょうにちにしんぶん(東京日日新聞発行)/昭和8(1933)年

※「光丘文庫デジタルアーカイブ」でもご覧いただけます。



発行したのは外野町と の まち(現相生町あいおいちょう)にあった荘司新聞店で、「東京日日新聞」の酒田専売所として営業していました。

当時の一般的な地図では珍しく行政区域が明確に描かれています。特に、8年後の昭和1

6年に酒田市へ合併することになる^{にしあらせむらさかいしんでん}西荒瀬村酒井新田地区や^{なかひらたむらはまだ}中平田村浜田地区との境界線が、はっきりと確認できます。



酒田市民歌を知っていますか？
まぼろしの市民歌♪

レコード「酒田行進曲」(個人蔵) 昭和8(1933)年

酒田市制施行を記念して制作された市民歌で、山形新聞社が郷土の市民歌として歌詞を懸賞募集し、「酒田行進曲」が誕生しました。作詞者は最上郡角川村の^{もがみぐんつのかわ}小学校教師・山口喜市、作曲者は鶴岡市出身でポリドールレコード東京吹込所長を務めた辻順治^{つじゆんじ}です。歌は池上利夫^{いけがみとしお}が担当し、後に松平晃^{まつだいらあきら}という芸名で流行歌手として活躍しました。

完成したレコードは同年3月29日に宣伝盤として市内の小学校に配布され、児童たちがこの歌を歌いました。そして市制施行日の4月1日には山形市旭座で、翌2日には酒田市^{しもたくみまち}下内匠町の酒田館で発表会が開催され、新しい市民歌が市民に披露されました。



酒田市制を祝う仮装行列/昭和8(1933)年

酒田市が誕生した昭和8(1933)年4月1日には、新聞社と民間団体による祝賀パレードがあり、さらに7月24日には酒田市主催の小学生の旗行列・提灯行列、市民による仮装行列などの祝賀行事が行われました。写真は仮装行列の様子です。



市制施行記念写真/昭和8(1933)年

酒田市の市制施行を記念して市役所前で撮影された職員の記念写真です。前列中央には、右から五十嵐太兵衛^{いがらしたへえ}助役、中里重吉^{なかざとじゅうきち}市長、青塚恒治^{あおづかこうじ}助役。

市制施行記念した芸術祭

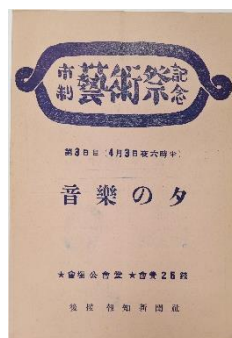
昭和8(1933)年4月1日から7日までの1週間、市制施行を記念する芸術祭が開催されました。この祭典では、酒田市公会堂で音楽会と酒田風景展覧会が催され、港座では映画会と演劇の夕べが催されました。



芸術祭通し券



芸術祭プログラム



芸術祭音楽の夕パンフレット



芸術祭演劇パンフレット

大正4年から昭和38年までの酒田町・市章

大正4年（1915）年、酒田駅の開業を記念して町章として制定されました。その後、市制施行により酒田市となっても、昭和38（1963）年まで市章として使われ続けました。

この町・市章は「酒田」の文字をもとに、行政を表す「土」、農業を表す「土」、さらに「工」「商」の文字と、港町を象徴する錨いかりのデザインを組み合わせています。産業の発展と港町としての酒田の特色を表現しています。



昭和38年から平成17年までの酒田市章

この市章は、酒田市が市制30周年を迎えた昭和38（1963）年に制定されました。中央の「さ」の文字は酒田の頭文字を表し、その下部は港町である酒田の象徴として海の波頭を表現しています。上部の翼のような形は酒田市のさらなる発展への願いを表し、全体を包む円形は市民の融和と団結を意味しています。



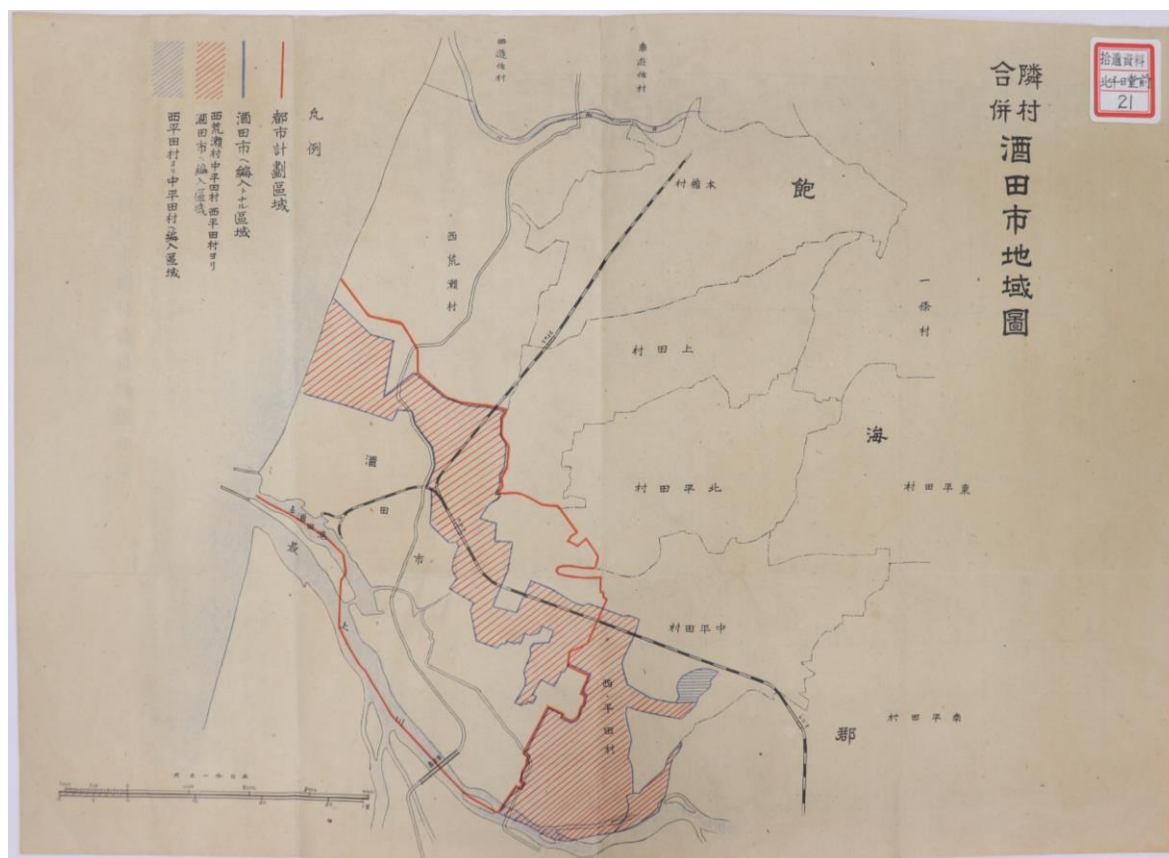
酒田市域拡大 にしあらせむら なかひらたむら にしひらたむら 西荒瀬村、中平田村の一部、西平田村の合併

大正3（1914）年、西荒瀬村酒井新田に酒田駅が設置されると、駅前通りに商店が立ち並び、人口が急増しました。酒井新田尋常小学校の増築問題をきっかけに大正8（1919）年には西荒瀬村会で酒田町との合併を望む声が上がりましたが実現しませんでした。

一時中断していた合併問題は、昭和13（1938）年に再び活発化しました。酒田市会議員有志が隣接する西荒瀬村、中平田村、西平田村の議員に呼びかけ、「酒田市合併研究会」を結成して協議を重ねました。

各村とも複雑な事情を抱えており、西荒瀬村の酒井新田地区は合併を熱望していましたが、この地区を失うと村の運営が困難になる懸念がありました。中平田村では一部合併で十分とする意見もありましたが、村長は全村合併を主張しました。西平田村では主要集落である四ツ興野と大町が合併を望み、これらの地域を失えば村の運営が成り立たなくなることから、全村合併の方向に傾きました。

こうした各村の事情を調整した結果、昭和16（1941）年4月1日、西荒瀬村の酒井新田と高砂、中平田村の浜田・大多新田・小牧の一部、そして西平田村全村が酒田市に合併され、市域が大きく拡大しました。



◀ 隣村合併酒田市地域図
昭和一六（一九四一）年



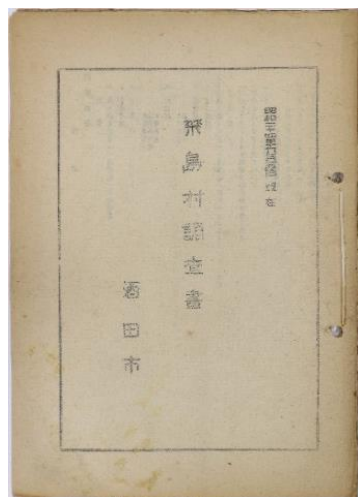
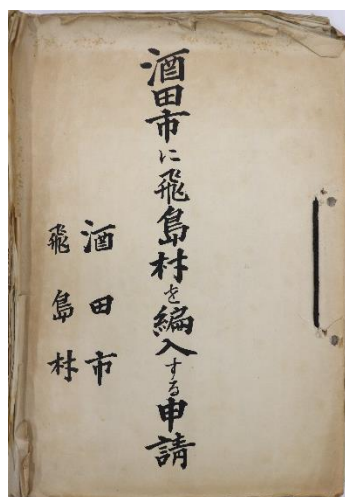
◀ 祝隣村酒田市合併記念式(酒田毎日新聞)
昭和16(1941)年4月22日付

飛島村との合併

昭和24（1949）年、日本を訪れたアメリカ税制使節団長シャープが税制改革を勧告し、その中で地方自治体の強化が図られました。市町村単独での活動維持が困難な場合、隣接地域との合併が推奨されました。

戦後の昭和22（1947）年頃から、酒田市と^{とびしまむら}飛島村の合併が課題となっていました。酒田市では賛否が分かれ、合併により水産業開発や飛島港の利用、観光面でメリットがあるとする意見がある一方、飛島の厚生施設整備や水道・電気・教育・道路などのインフラ整備に多額の費用を要し、市民の負担が重くなるとして反対の声もありました。

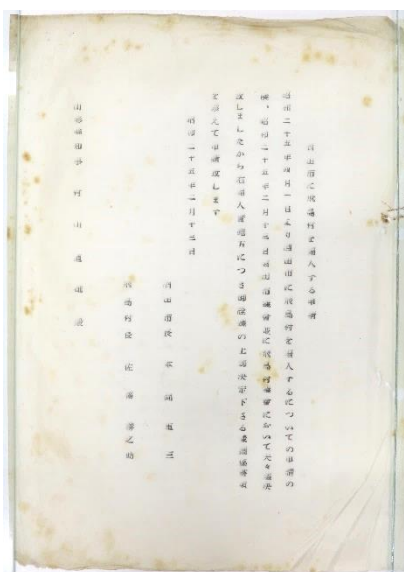
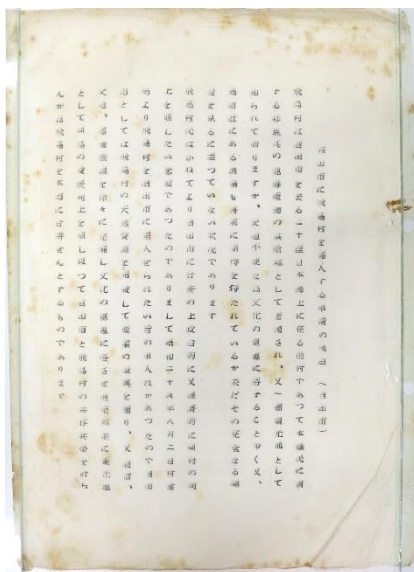
^{とびしまむら}飛島村は生活向上と産業振興のため、昭和24年8月2日に酒田市へ正式に無条件合併を申し入れました。酒田市は同年9月5日に『^{とびしまむら}飛島村調査書』を作成して実態を詳細に調査。



◀ 飛島村調査書
昭和二四（一九四九）年九月五日現在

市民が懸念する負担増について、市長は「長い目で見て徐々に市民の負担にならないように^{とびしまそんみん}飛島村民の生活を向上していく方針で進みたい」として合併への理解を求めました。

昭和25（1950）年2月13日の市議会で飛島合併案が満場一致で可決され、同年4月1日、^{とびしまむら}飛島村は酒田市と合併しました。



酒田市に飛島村を編入する申請(複製)/昭和25(1950)年2月13日
知事に宛てた文書の控え



◀飛島合併 祝賀市民大観櫻會(さかた新聞)
昭和二五(一九五〇)年四月一六日付



◀飛島は招く(酒田市観光協会)
昭和二七(一九五二)年
合併後に発行されたパンフレット

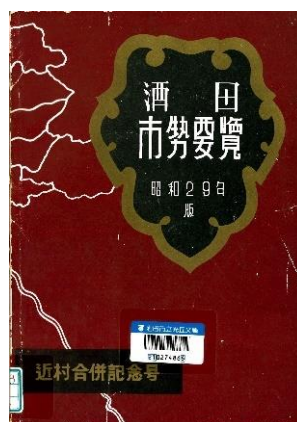
昭和の大合併

昭和28(1953)年9月1日に公布された「^{ちょうそんがつぱいそくしんほう}町村合併促進法」は、町村の合併によって規模の適正化と運営の効率化を図ることを目的としていました。この法律では、合併適正規模を人口おおむね8千人以上とし、10万人未満の市についても町村との合併が推進されました。

酒田市では同年に、市制20周年記念事業の一環として隣接する各村との合併の検討が始まりました。特に^{にしあらせむら}西荒瀬村は、酒田市との生活圏が密接で、通勤者が増加し、生活経済圏が拡大していた一方、単独自治体としての財政運営が困難であったため、合併に積極的でした。そのため他村に先駆けて昭和29(1954)年8月1日に合併が実現しています。

同年12月1日には、^{にいぼり}新堀・^{ひろの}広野・^{そでうら}袖浦・^{ひがしひらた}東平田・^{きたひらた}北平田・^{なかひらた}中平田・^{うえだ}上田・^{もとたて}本楯・^{みなみゆざ}南遊佐の9ヶ村が酒田市と合併しました。新酒田市の人口は9万3千719人、面積は171平方キロメートルとなりました。

10ヶ村との合併により、行財政規模が拡大し、総体的にみて役所費などの管理費が削減された一方、教育・土木・社会福祉・保健衛生・産業経済など市民福祉を直接向上させる経費の比率が高まりました。さらに行政事務の効率化、福祉施策の充実、工場地帯や住宅地の拡張、運動施設や公共施設の整備、川南地区への統合中学校建設などが可能となり、広範囲からの人材登用により市政運営も強化されました。



(右)広報さかた(複製)/昭和29(1954)年
(左)酒田市勢要覧 /昭和29(1954)年



西荒瀬村合併記念式典の様子

昭和29(1954)年7月31日

この記念式典では、^{にしあらせむら}西荒瀬村が酒田市に合併することを嫁入りに見立てた趣向を凝らしたユニークなパレードが行われました。写真の看板には、「花嫁」として^{にしあらせそんちやう}西荒瀬村長の金内権四郎の名前や、「^{むらやまみちお}仲人」として山形県知事の村山道雄の名前を見ることができます。



西荒瀬村合併を記念して万歳をする子供たち

昭和29(1954)年7月31日

西荒瀬小学校前にて



仮装行列/昭和29(1954)年12月5日 ▶

午後6時に日和山公園を出発した行列は、市内の通りを練り歩きました。この催しには官公庁や会社、工場、商店などの団体のほか、個人の参加者も多数加わりました。沿道には行列を一目見ようと集まった多くの人々が詰めかけ、街全体が祝賀ムードに包まれていたことがうかがえます。

^{やわたまち まつやままち ひらたまち} 八幡町、松山町、平田町の誕生

昭和29(1954)年の昭和の大合併の時期、酒田市周辺では新しい町や村が次々と誕生しました。現在の酒田市を構成する^{やわたまち まつやままち ひらたまち}八幡町・松山町・平田町の旧3町も、この時期に生まれています。

昭和28(1953)年、飽海地方事務所長から各郷(^{ゆざごう}遊佐郷、^{あらせごう}荒瀬郷、^{ひらたごう}平田郷、^{まつやまごう}松山郷)に町村合併研究会の設置要請が出され、合併への動きが本格化しました。

まず昭和29年8月1日に、^{みなみひらたむら}南平田村・^{たざむら}田沢村・^{きたまたむら}北俣村の3ヶ村が合併して^{ひらたむら}平田村が誕生

合併した3つの町の町章



旧八幡町



旧松山町



旧平田町

しました。東京オリンピックが行われた昭和39（1964）年に合併10周年を迎え、町制を施行して平田町となりました。

昭和29（1954）年10月1日には、日向村・大沢村・一條村・観音寺村の4ヶ村が合併し、八幡町が誕生しています。

松山町の誕生は昭和30（1955）年1月1日で、松嶺町・上郷村・内郷村の1町2ヶ村が合併しました。当初は田沢村と北俣村も含めた1町4ヶ村での合併が計画されていましたが、両村が離脱したため調整に時間を要し、飽海郡内では最後の合併となりました。

これら3町は後の平成の大合併により、酒田市と合併することになります。

湯野浜合併問題

湯野浜地区は鶴岡市にある温泉地で、湯治や海水浴で多くの観光客が訪れています。この地区をめぐる、昭和29（1954）年から4年間、全国的にも珍しい合併問題が続きました。

問題の発端は、昭和29年に県の合併委員会が出した「加茂町に豊浦村・上郷村を合併する」という原案でした。ところが翌年1月、加茂町が突然酒田市への合併を申し入れ、酒田市は当初慎重でしたが、商工会議所の賛成をきっかけに市議会でも湯野浜地域分市受入合併委員会が設置されました。

これに対し鶴岡市は、湯野浜温泉を抱える加茂町を失うことは市民にとって一大事として、加茂町に合併を申し入れました。加茂町議会は酒田市への申し入れを取り下げましたが、湯野浜・金沢・宮沢などの北部住民が強く反対し、住民大会を開きました。



湯野浜温泉街の様子/昭和33(1958)年

湯野浜合併問題の経過

年月日	経過
昭和30年1月27日	加茂町議会が酒田市への合併申入れを議決
昭和30年2月1日	加茂町が酒田市に合併の申し入れを行う
昭和30年2月25日	鶴岡市が加茂町に合併の申し入れを行う
昭和30年3月10日	加茂町議会が酒田市への合併申入れの撤回を議決
昭和30年3月13日	加茂町北部住民により酒田市合併促進期成同盟会が設立
昭和30年3月22日	加茂町議会が鶴岡市による合併申入れ受諾を可決
昭和30年3月24日	酒田市議会が酒田市合併促進期成同盟会による合併請願書を採択
昭和30年6月16日	分市を望む加茂町北部の住民が「自治町」を設置
昭和30年7月29日	加茂町が鶴岡市に編入
昭和30年12月6日	酒田市議会が加茂町北部住民等による合併請願書を採択
昭和31年6月30日	市町村の境界変更に関する斡旋、調停及び住民投票に関する規定を含む「新市町村建設促進法」が公布・施行される。
昭和31年8月3日	鶴岡市議会が湯野浜地区の分市を認めない決議をなし、市長・議長連名で声明書を発表
昭和32年7月1日	湯野浜分市貫徹決起大会が湯野浜地区で開催され、約千人が参加。住民投票早期実施等を決定
昭和32年7月9日	約70人の分市賛成派と反対派が衝突、警察官が出動
昭和33年4月20日	湯野浜地区の境界変更に係る住民投票が実施される。 有権者数 2,106人 投票総数 1,989人 有効投票 1,981票 無効投票 8票 分市反対票 706票（法定得票数 661票） 分市賛成票 1,276票（法定得票数 1,321票） 分市賛成派は有効投票数の3分の2（1,321票）の得票を得ることができず、市の境界は現状のままとなった。
昭和33年5月5日	分市賛成派による鶴岡市選挙管理委員会への異議申立て提出（却下）

参考：山形県市町村合併誌

その後、加茂町の鶴岡市への合併が決定しましたが、加茂町北部の湯野浜と酒田市は「酒田市合併促進期成同盟会」を結成し、鶴岡市と激しく対立しました。

4年間続いた問題は、昭和33（1958）年4月20日の住民投票で決着がつけられました。賛成派は有効得票数の3分の2を獲得できず、現状維持となりました。この問題は湯野浜分市

賛成の立場で激しい運動を展開してきた酒田市にも市政・財政面で大きな痛手を与えました。



酒田合併賛成派のデモ行進
昭和三二（一九五七）年三月二六日



酒田市側の演説の様子/昭和30年代



湯野浜分市貫徹決起大会に集まった人々

昭和32(1957)年7月1日

7月1日午後8時、湯野浜温泉の湯元本館前広場におよそ1,000人の住民が集まりました。これは鶴岡市からの分市に賛成する人々による決起大会で、写真には「サンセイ」と書かれたうちわを手にした参加者たちの姿が写されています



湯野浜分市貫徹決起大会の記事(湯野浜サンセイ)
昭和三二（一九五七）年七月三日付

平成の大合併と酒田

昭和29(1954)年以降、高度経済成長により国民生活は大きく変化しましたが、その後約40年間、全国的に市町村数はほとんど変わりませんでした。

しかし、経済成長の一方で東京一極集中が進み、これまで地域を支えてきた家族やコミュニティが大きく変化し、市町村への負担が増大しました。さらに人口減少・少子高齢化が進み、住民サービスも複雑・多様化するなど、市町村を取り巻く環境は厳しさを増していきました。

このような状況を背景に、平成11(1999)年から「平成の大合併」と呼ばれる全国

的な市町村合併が積極的に進められました。

酒田市においても、平成17(2005)年11月1日に酒田市、八幡町、松山町、平田町^{やわたまち まつやままち ひらたまち}の1市3町が合併し、新しい酒田市が誕生しました。合併前日の10月31日には、酒田市の希望ホールや各町役場前でそれぞれ開庁式が行われました。歴史を振り返るスライド上映や市町章旗の降納などが執り行われ、各市町の歴史に幕を閉じ、新たな酒田市の歩みが始まりました。



酒田市開市式/平成17(2005)年11月1日

酒田市開市式は市民会館「希望ホール」で開催されました。式典では、合併した旧4市町の中学生8名が、新酒田市の市章の旗を除幕し、新たな市の門出を祝いました。



酒田市開庁のテープカット

平成17(2005)年11月1日

酒田市開市式の後、隣接する本庁舎（旧酒田市役所）正面玄関前で開庁式が行われました。この式典では、日野雅夫副知事、今井栄喜県議会議員をはじめ、旧4市町の首長と議長の計10人がテープカットを行いました。



◀ 現在の酒田市の市章

「酒田市」の頭文字「S」を骨格として、日本海を表す青と、庄内平野・鳥海山を表す緑の空間の中で、最上川の流れに見立てた4本の波（1市3町）が未来に向けて羽ばたく様子をデザインしています。

この市章は、平成17年6月30日から7月29日まで一般公募が行われ、354人から598作品もの応募がありました。応募作品の中から選ばれた最終候補作品に、専門家による補作を加えて完成しました。

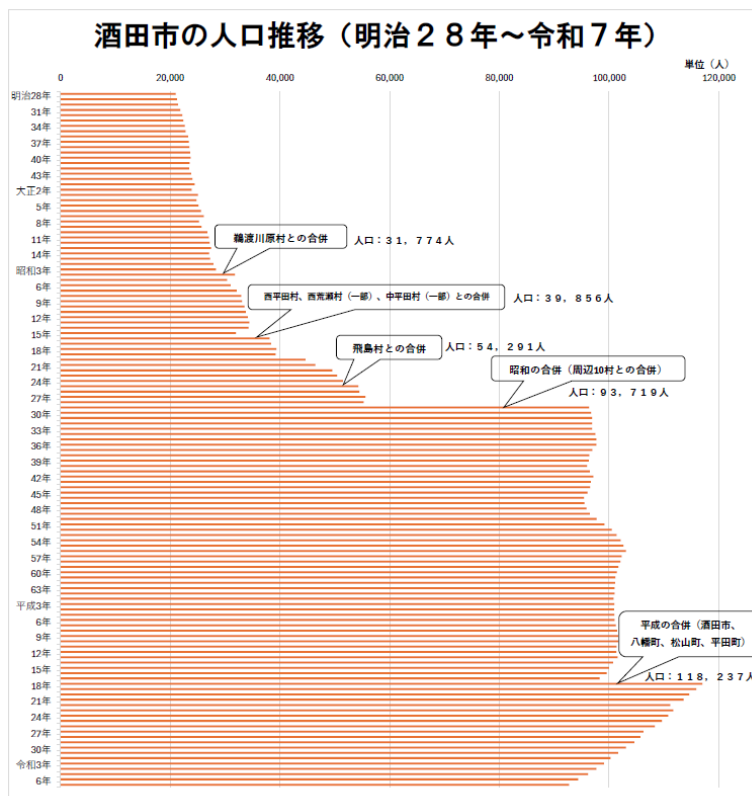
あなたは酒田市の未来についてどう考えますか？

明治から平成にかけての酒田の合併の歴史を振り返ると、そこには常に「より良い未来」への願いがありました。様々な問題に直面しながらも、先人たちは地域の枠を越えて手を取り合い、新しい酒田を築き上げてきました。

合併を通じて、それぞれの地域が持つ豊かな文化や伝統、そして人々の営みが一つに結ばれ、より大きな可能性を秘めた酒田市が誕生しました。自然の恵みや歴史、そして何より人々の絆という財産は、合併によってさらに強固なものとなったのではないのでしょうか。

これからの酒田市には、どのような未来が待っているのでしょうか。人口減少や高齢化といった課題もありますが、先人たちが示してくれたように、知恵を出し合い、力を合わせれば未来はより明るいものになるでしょう。

過去から現在へと受け継がれてきた想い。そして未来へ向かう希望。あなたにとって、酒田市の理想の未来とはどのような姿ですか？

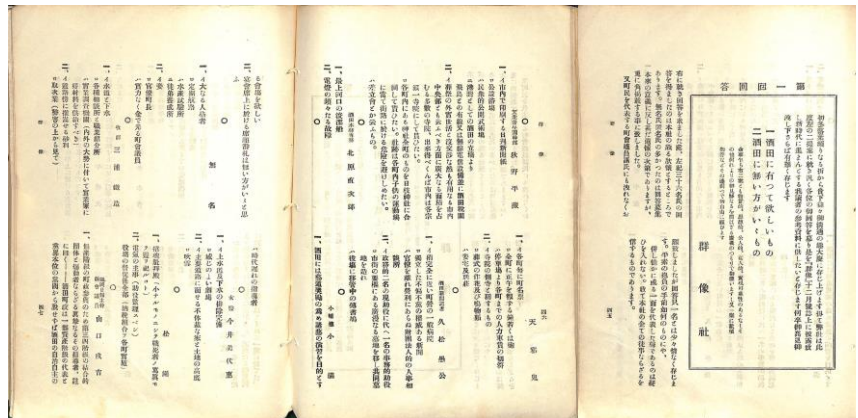
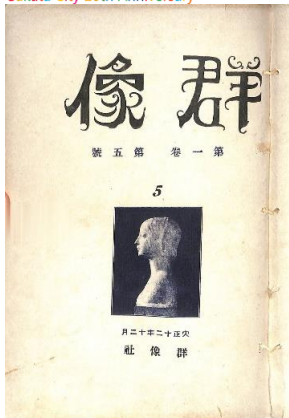


◀ タイムカプセル2083年これを開く

このタイムカプセルは、酒田市が市制施行50周年を迎えた昭和58（1983）年に埋設されました。

この年に市制50周年を祝う様々な記念事業が開催されました。全国市長会港湾都市協議会総会の開催、青少年芸術劇場でのバレエ公演、そしてこのタイムカプセルの埋設事業などが行われ、市民とともに節目の

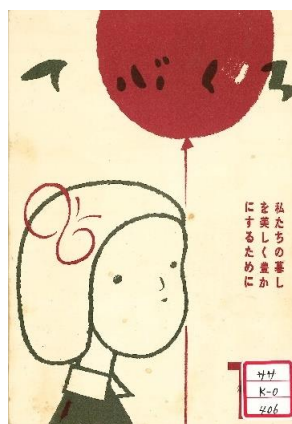
年を祝いました。タイムカプセルは酒田市総合文化センター北側の公園に埋められています。今から58年後にその封が解かれます。



雑誌『群像』/大正12(1923)年12月

雑誌『群像』は、大正12(1923)年8月10日に樋口喜一が編集兼発行人となって群像社から創刊された総合雑誌です。政治、経済、社会、文学といった幅広い分野を扱っていました。しかし、昭和2(1927)年5月の第21号を持って、多くの読者に惜しまれながら廃刊となりました。

こちらは創刊から4か月後に発行されたもので、「1. 酒田に有って欲しいもの、2. 酒田に無い方がいいもの」というテーマで様々な業種の方が酒田について語っているページの一部になります。



「日和山公園の広場を一面池にして水族館にする」
驚きの大胆なアイデア

「絶対に飛行場は欲しいですよ」
交通インフラへの熱い想い

「大地震や大火のために緑地帯というものが必要じゃないですか？」
災害に強い街づくりへの想い



「酒田の人口は50万人になる!」
現在の約5倍!
酒田発展への期待

「日和山公園に燈台を置いたり、ロマンチックな遊楽場を作る」
夢いっぱいの遊園地構想

雑誌『てぶくろ』/昭和33(1958)年4月号

昭和31(1956)年4月、酒田の5つの商店が「酒田五店会」を結成しました。中村太助商店、中村イトヤ、ごろや、小松屋、七桜の5店舗が参加し、商業活動で得た利益を地域社会に還元することを目指しました。

五店会は、レコードコンサートや写真コンテストなど多彩な文化活動を展開。その一環として、昭和32年から34年にかけて無料のPR誌「てぶくろ」を発行しました。現在のフリーペーパーの先駆けとも言えるこの雑誌には、佐藤三郎をはじめとする酒田の文化人が編集に携わり、当時の商業美術界を牽引していた佐藤十弥がデザインを手がけました。

昭和33年4月号では「50年後の酒田 夢ものがたり座談会」という特集が生まれ、当時の人々が酒田の未来について語り合う内容が掲載されています。